

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390500148		
法人名	社会福祉法人 石鳥谷会		
事業所名	グループホーム いしどりや荘		
所在地	岩手県花巻市石鳥谷町好地14-10		
自己評価作成日	2011年8月20日	評価結果市町村受理日	平成23年11月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www2.iwate-silver.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0390500148&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	(財)岩手県長寿社会振興財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内
訪問調査日	平成23年9月13日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

同じ敷地内に同法人の特別養護老人ホームいしどりや荘などがあり、日常的に介護面・医療面などバックアップ可能な体制が整っている。利用者の介護度が高くなり、身体介護の必要性が大きくなった場合などは、希望により優先的に特別養護老人ホームへの入所が出来るようになっており、馴れた環境で住み続けることが出来ることで、本人や家族共に安心感がある。スタッフの殆どが、特別養護老人ホーム(従来型・ユニット型)やデイサービスなど経験豊かで、スタッフの約半数が認知症介護実践者研修の修了者であり、多くの介護経験や認知症の知識を生かし、利用者の対応を行なっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設して1年5ヶ月余りのグループホームであるが、職員は、母体法人の介護施設での勤務経験が豊富であること、更にグループホームでの勤務をしていく中で、グループホームの特性である家庭的なあり方を認識・共有しながら利用者の支援にあたっている。また、業務主任をリーダーに進取に取り組もうとする姿勢が見受けられる。3月11日の大地震に際しての利用者と職員の対応を、地震発生から3月13日午後までを時系列で記録し、そこから、課題・問題点を把握しつつ次への取り組みを考えている。このように、自分たちのサービスの質の向上のため、真摯な取り組みが見受けられた。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の「経営理念」「行動指針」を基本として、GHの「介護方針」をスタッフの共通目標として今年度作成した。	法人の理念の下に、「いつも優しく笑顔で」「その人らしい自由な生活」「あんしん・安全な生活」の三つをグループホームの介護方針として全職員が話し合いで決定し、毎日のケアにあたる原点としている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	法人全体の行事において、町内の保育園・小学校・中学校・高校、地域の方々の踊りやボランティアなどにより交流がある。	法人全体で受け入れているボランティアや、学校・保育園の生徒、子ども達との交流がある。地域の方々との交流を更に深め、事業所の存在意義を高めるようよく努力されているが、設立間もないこともあり、これからの一層の多方面にわたる広報活動が期待される。	現在の交流を続けるとともに、グループホームを地域の一員として、地域との付き合いをすることが大切である。どの様にして関わりを持ち、付き合いっていくか今後の工夫に期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々や隣接する特養入居者の家族などの見学を受け入れしている。今後は実習の受け入れや職場体験などの受け入れも行っていきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月毎に定期開催している。現在の状況や行事実施報告している。運営会議での助言や意見をスタッフ会議で報告し、改善につながるように活かしている。	運営推進会議の議事録(平成23年度第1回、第2回)からは、報告とそれに対する質疑応答と意見など、会議の内容は充実したものになっているようで、地域との付き合いのあり方などもテーマとなっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に毎回、地域包括支援センターのケアマネに参加して頂き、意見交換している。	地域包括支援センターのケアマネジャーは、運営推進会議に参加して頂き、助言等をいただいている。利用者の介護度が高くないことや生活保護を受けている方がいないこともあり、市の担当と連携する機会が少ない。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	夜間は防犯のため玄関の施錠を行なっているが、日中は行っていない。法人全体として「身体拘束ゼロを目指して」を玄関に掲げている。また、法人として身体拘束委員会を設置し、GH職員もメンバーとして参加している。	法人の身体拘束委員会で、検討と研修を毎年実施しており、拘束をしないことを原則に掲げ、グループホームとしては、利用者の様子をさりげなく見守ることで自由な暮らしを支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることのないよう注意を払い、防止に努めている	普段から、言葉遣いなどを気をつける配慮をしている。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム いしどりや荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在必要とされる方がいませんが、制度として必要な時に活用できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	重要事項説明書などの資料を用いて説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の想いを傾聴し、不満・苦情を受け止め改善に取り組んでいる。ご家族とは面会時などにお話するように心がけている。電話等での苦情・相談にもしっかり耳を傾け、対応できることは十分に検討している。	今年1月から傾聴ボランティアを受け入れるとともに、家族懇談会を運営推進会議の場で開催、認知症を理解いただくことに努めると同時に、家族の意見を求める機会にもしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人で毎月定期開催の経営検討会議の中で、各事業所からの状況報告・意見・提案がある。法人全体の提案制度を実施しており、提案事項は十分検討され、施設運営などに生かされている。グループホームとしても、月1回のスタッフ会議を開催し、各スタッフからの意見交換を行っている。	職員の提案や要望を受け、現在、勤務時間を全体的に見直す作業を進めている。また、家族懇談会を運営推進会議の場で開き、認知症を理解していただく機会を求めたのも職員の提案からであり、可能な限り反映している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度に取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各種研修会に適任者を参加させ、専門的に業務に従事できるよう努めている。また、法人内で全体研修会を定期開催したり、職員個々で勉強会の開催などを行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム研修会などへ積極的に参加することが必要と思われるが、実施にまでには至っていない。3か年計画で全職員対象に県外への施設視察研修を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	日常から本人の状態や思いを聴くようにしてコミュニケーションを密にし、その情報は職員間で共有しながら、状況把握や関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人の状態や家族の困っていることをゆっくり聴いている。施設内を見学し、GHの生活を見てもらい、生活上の不安なことをよく聞いて、理解するように心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスの必要性などを説明し、十分に理解、納得して頂くことでサービスを開始している。サービス開始後も家族の不安解消に努めるため、電話や面会時の相談にも柔軟に対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	調理の下ごしらえや後片付け、掃除などの家事全般、家庭菜園での野菜などの育て方など、個々の能力に応じて出来る事を、役割分担し一緒にいたりしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	夏祭りなどのご案内をお送りしており、参加していただけるように法人全体で取り組んでいる。また、面会時に、日々の様子や気づきなどを伝えたり、個々のケース記録を毎月郵送している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの物は持参頂くように説明している。知人や友人の面会は、周囲に気兼ねなく過ごしていただけるように努めている。	母体法人のデイサービスに来ている馴染みの関係のある利用者を訪ねたり、行きつけの理美容院の利用や、お盆などの帰宅は、家族の協力を得て、実施している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	互いに食事や散歩などに誘い合ったり、出来ること出来ないことを助け合いながら生活できるように、スタッフそれぞれが理解し、常識にとらわれずに支えていくように努めている。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム いしどりや荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の特養や居宅支援事業所など、法人全体でフォローできる体制を整えている。退所後、同法人特養への入所の際は、情報を提供し本人が新たな生活により早く適応できるように努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段から傾聴の気持ちで、利用者が話しやすい雰囲気作りに努めている。困難ケースに関しては、日々の表情や行動などを汲み取り、ご家族からの情報提供や、主治医への相談などで本人に合わせた対応が出来るように努めている。	医療的なことを訴える利用者があり、家族と連絡を取り合い、本人の希望を汲み取りながら取り組んでいる。一般的には、日常生活の中で声をかけをしたり、言動をさりげなく注意をし、見守りながら、利用者の意向や思いの把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所の際、家族より情報を得ており、入居後も、面会時や電話などで連絡を取り合っている。また、本人との会話の中から読み取れることも多いので、記録に残したりしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日、業務日誌に1日の様子を時間ごとに記録している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々のミーティングや月1回のカンファレンスなどで話し合い検討している。家族参加はできていないが、面会時や電話連絡時に話や意見をいただくようにしている。	月1回のカンファレンスで検討・確認したケース記録の特記事項は、家族に対し、電話または面接して伝え、家族の意見を求め、次の計画に取り入れており、ケアマネージャーの原案に対し、職員の検討・意見を入れて計画の作成をしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個別に記録しており、その内容を基にケアプランの見直しや日々のケアに生かすようにスタッフ間で情報を共有し、話し合いを行なっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の希望によって、買物や外出、ドライブなど柔軟に対応している。また、法人内の認知デイや特養など他事業所の協力も得ながら対応している。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム いしどりや荘

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎月、床屋さんの来荘がある。地域の協力を得ての避難訓練など法人全体での協力を得ている。傾聴ボランティアの受け入れを毎月行っている。	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からのかかりつけ医への受診を継続し、症状に合わせて受診調整を家族と連絡しながら行っている。必要に応じてスタッフの付き添い、主治医と直接相談することもある。	多くは、グループホームに入居する前からのかかりつけ医になっている。受診の場合は、家族が介助することを原則としている。家族による支援が出来ない場合は、グループホームの職員が支援している。いずれの場合も、利用者の健康状況をかかりつけ医に提供するなど連携を密にするよう努めている。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師を兼務する当グループホームのケアマネが中心となり、介護職も利用者の健康管理に積極的に対応している。また、併設された他事業所の看護師の協力を得る体制も整っている。	
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力病院とは連携をとりながら、情報交換を行なうことができるように連携に努めていきたいと思っている。	
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合は、優先的に法人内の特養に移ることも出来ることを説明している。	利用者本人と家族の意向を踏まえながら、重度化した場合は、母体法人の特別養護老人ホームでのケアをすることがグループホームとして現在とり得る最良のケアと考えている。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署主催の「上級救急救命講習」等に参加し、その内容をもって、事業所内で研修を開いたりしている。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災発生用に緊急警報装置やスプリンクラーを設置している。年1回の避難訓練を消防署・地域住民・地元消防団の参加により法人全体で実施している。	防災計画の作成、上好地公民館を中心とする地域防災活動への組み入れ、非常用食料や備品の準備等、よくなされているが、部分訓練を除き、総合訓練は年1回である。 3. 11の大地震の際に、利用者と職員の対応状況を時系列に記録し、反省と課題に真摯に取り組む前向きな姿勢がある。

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の関係を大切に、プライバシーに配慮しながら、得た情報は外部には漏れないように各スタッフに指導している。また、言葉掛けも馴れ馴れしくなり過ぎないように配慮するように努めている。	職員の研修で取り上げ、意識付けに力を入れてきた。日常生活の中では、さりげない見守りと声かけに留意し、利用者本人が自己決定しやすいように努めている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	他人にとっては意味のない行動でも、本人にとっては意味のあることだと理解するように努め、その行動を抑えることなく、本人と関わるようにしている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スタッフ側の都合で押し付けることなく、出来る限り本人が希望する生活を支援するように努めている。また危険が伴う希望の場合などは、代替の方法を提供し、説明するようにしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自発的におしゃれや身だしなみが出来るように支援している。(整髪、髭剃りなど)			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の下ごしらえや後片付けに関しては、スタッフと一緒にいるが、調理に関しては、現在は行っていない。	食材の買い物は、1～2名の利用者は職員と共に行っている。調理の下ごしらえや配膳、下膳なども職員と一緒にしている。食事を利用者と職員が共にすることは、1日の活動の大切な一つとなっている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量は、毎食チェックし記録している。食事内容に関しては、1ヶ月に1回程度、特養の管理栄養士に確認してもらい、助言をもらっている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	特に希望がない限り、みんなで誘いながら出来るようにリビングの洗面台に歯磨きセットを常備して行っている。			

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム いしどりや荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄記録表を使い、個々の排泄パターンを把握するように努めている。また、便尿意のサイン(表情や行動)に気付くように心がけ、誘導等を行なっている。	排泄パターンによって、利用者一人ひとりの状況を把握し、さりげなく誘導することに努めている。パッドは使用するが、できるだけ日中は普通の下着(綿の下着)を使い、夜間にも誘導をし、トイレで排泄出来るように支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便を促す食べ物や飲み物の摂取に取り組めるように考えているが、現在は薬に頼る部分が多くなっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	決められた入浴時間はあるが、希望があれば柔軟に対応している。	どの利用者も週2回は入浴出来るようにしている。時間は午後としているが、希望によっては柔軟に対応している。ただし夜の入浴については、職員体制の関係から対応出来ない状況にある。風呂はリフト浴槽である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者がリラックスして過ごせるようにリビングにソファを置いている。また、小上がりの畳のスペースがあり、昼寝をする方々が利用している。日中、居室で過ごされる方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎日、服薬箱に薬をセットしている。「薬の説明書」をファイルし、内容確認がすぐできるようにしている。薬の変更があるときには、日誌に記録するほか、申し送りノートに記入し、全スタッフが確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人の得意な仕事や趣味などが発揮できるような支援に努めている。職員が畑作りの指導をしてもらったり、元看護師の方には、脈を取ってもらったりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人希望があれば、食材の買い物へ同行していただいている。また、自宅への外出や墓参りなど家族への協力を得ながら外出できるようにお願いしている。	毎日の散歩は、職員が介助し、法人施設の敷地内を歩いたり、近隣地域に出かけている。また、花見、家庭菜園づくりなど、行事を通して戸外に出る機会をよく設けている。	

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム いしどりや荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には、預かり金として管理しているが、本人の能力に応じて日常的に所有している人もいます。ただ、希望されて所有されている方でも紛失の心配のある方には、家族への説明と理解を求めると同時に、スタッフが日々確認して紛失を防いでいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を所有されている方もいるが、使用方法の理解が出来ないこともあるので、代わりに電話を掛けて取次ぎを行ったりしている。家族からの贈り物の礼状を書いてもらいFAXしたり、電話を掛けたりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者にとって不快な音や光がないように配慮している。夜間の照明には特に気を使っている。	フロアのテーブルやソファの配置を工夫し、みんなで集い合う場と、独りでくつろげる場を作っている。また、壁飾りなど、幼稚なものにならないようにするなど高齢者の感性を考慮して空間を作っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	座る場所や、椅子、テーブルなど自然に定位置となり、個々に馴染んで過ごしている。それぞれ思い思いに新聞や雑誌、テレビなどを見たり、ソファで横になったりして過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際に、自宅で使い慣れた馴染みのベット、タンスを持ち込んでもらうことの意義を家族に理解協力してもらっており、実際に持ち込んでいただいている。	使い慣れた家具を持ち込んだり、神棚や思い出の写真を壁に飾りつけたり、利用者がそれぞれ自分の居場所づくりをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内部は全てバリアフリーになっており、トイレや浴室の手すりは介護士の経験上、利用者が使いやすい物を取り寄せて設置している。ベッドは体型に合わせて立ち上がりやすい物を購入した。		